

『民間防衛』こそかなめ

人類の平和維持を力説

長崎新聞 1988. 4. 29.

新しい本

▼「ヨーロッパの核と平和」
(ジャン・トウーラ
著、戸口民也訳)

原文の題は「あえて平和を

—ミッテラン・フランス大統領への提言—である。



「ヨーロッパの核と平和」

著者はカトリックの神父で作家。これまで「わが兄弟ユダヤ人」「爆弾が生命か」「死刑を問う」など二十冊を超える著書がある。またフランスの「ル・モンド」紙などでも論陣をはっており、活動が幅広く同国内では有名。一九七三年には、ムルロア環礁での核実験反対行動にも参加した。本書は、ミッテラン大統領あての「公開質問状」の形をとっている。まず同大統領が五年前のテレビ番組で「フランス

スにおける抑止戦略の要は國家元首すなわち私である」と明言したことをとらえて「抑止」と「大統領」とが、同じ意味をもつのであれば、核君主制と民主主義への配慮とを、どのようにして両立させるのか」と疑問を投げかけている。つまり、「核兵器を絶対に使わない」と公式に発表したら、相手の攻撃を抑え込む力にならない。「攻撃されたら必ず核兵器を使う」と発表して、初めて敵を事前に抑え込む可能性がある。だが、人道主義、民主主義を唱える国、人間の尊厳を認める国が核兵器を使う覚悟をもつことは神、人類に対して最大の罪を犯す覚悟をもつことになる、と同国の核兵器保有、開発や、それに伴う「抑止論」に鋭く切り込んでいる。

著者は長崎市の「恵の丘長崎原爆ホーム」や広島島の平和記念資料館などに足を運び、被爆の実相も見聞。「国の安全保障を図るために武力や暴力に頼るのではなく、非暴力、非武装による『民間防衛』こそ人類の平和維持のかなめである」と力説している。なお、訳者の戸口氏は長崎外国語短期大学教授。

(三一書房、四六判、二八二頁、二、五〇〇円)